

昭和63年度 卒業論文



昭和71年入学 哲 学科 倫理学 専攻

氏名 江口 聡

論文題目

キルケゴールの死に至る病における
倫理思想

(参考論文 冊添付)

審査教官名	閱了月日	閱了印
西谷 助教授	2 月 2 日	
水垣 教授	2 月 9 日	
教授	月 日	
教授	月 日	
教授	月 日	

序文

キェルケゴールは確かに、キリスト教を信奉する著作家だった。とは言っても、独断的な教義家であつたわけではない。キリスト教の教義をただ反復し、無条件にキリスト教を最善のものと断言しようとも、信仰の無い者を信仰に導き入れることはできない。恐らくは、ただ反撥を覚えるだけでは無かろうか。

どの現実の人間にも確かに妥当するようなものが無くしては、キリスト教は、信仰をもたないものにとっては、空想や、おとぎ話でしかなくなってしまうのではないだろうか。そのような信仰をもたない者を、「教化と覚醒(S.1)」するものが、キリスト教の「倫理的な側面(S.3)」なのである。

『あれか||これか』では審美的生活と倫理的生活の葛藤を取り上げ、続く『恐れと戦き』においては、倫理と信仰のせめぎあいを扱った。『不安の概念』では、不安という現象を通して悪と罪の問題を考察し、その序文で「第二の倫理学」を提唱するキェルケゴールの思索は、正に、この倫理を中心に回っていたと言つても、間違いではないだろう。

この研究では、『死に至る病』におけるキェルケゴールの倫理観を、特に、彼が称えるソクラテスと、キリスト教的なものとのかわりに注目して見てみたい。

テキストはE. Hirschドイツ語訳 “Krankheit Zum Tode”

Eugen Diederichs社刊

引用はページ数。H. Hong and D. Hong 訳の英訳と、舛田啓三郎の日本語訳を参照した。

一

キェルケゴールは、彼の著作を通して一貫してソクラテスを第一級の倫理家としてたたえている。しかしソクラテスのどのような面がたたえられるのであるか。まず最初に、このことを考えることによって、キェルケゴールの倫理観に近づいてみたい。

キェルケゴールは、『死に至る病』において、ソクラテス的な考え方こそ、彼の同時代人にとって、最も必要なものであり、また、最も忘れ去られていたものなのだと宣言する。しかも、このソクラテス的なものは、キェルケゴールの同時代人にたいして「皮肉な倫理的矯正(S. 92)」として働くのだと言う。では、このソクラテス的なものによって矯正されるべき同時代人は、キェルケ

ゴールの目にどう映っていたのだろうか。

『死に至る病』において、キェルケゴールに最も辛辣に攻撃されるのは、口では正しいことを言い、したがって、正しいことを、理解している筈なのにも拘わらず、いざ行動するときには、正しくないことをしてしまふというような人間であった。難行苦行の物語や、真理のために生命を捧げる崇高な心の物語を読み、感動しながらも、虚偽に勝利させるために苦勞する人間、堂々と真理を説きながらも、ささいな困難から逃げ出す人間、世間をくだらないと考えながらも、まさにその世間からの名声を求め人間、キリストの悲惨な生涯を理解したと断言しながらも、自分は世間の安樂のうちに生活しようとする人間、これらの人々はすべて、キェルケゴールによって、「滑稽」であるとして、皮肉られる。そして、これらの人々が、正に、「倫理的矯正」を受けなくてはならないとキェルケゴールは言うのである。

では、彼らの滑稽さは、一体、どのような所にあるのだろうか。一瞥してわかるように、それは、彼らの言うことや、考えていることと、彼ら自身の姿が、食い違っているということにあるのである。理解したことが、その当人の生活に反映されず、生活と矛盾するとき我々は滑稽を感じるのである。このような矛盾、このような滑稽を、古代ギリシャにおいてソクラテスは、アイロニーによってとりあげたのであった。

正しいことを、本当に理解したのであれば、その人は、その理解したことを生活に反映する筈であるし、理解したことを、実行する筈である。その人が、それを実行しないのなら、実は、理解などしていなかったのである。つまり、理解していると思ひ込んでいただけに違いない。

ソクラテスが古代においてなしたことは、まさににこの誤った種類の理解を発見し、自分が知者であると思ひ込んでおり、他人にもそう呼ばせている人々が、実は何も知らないに等しいことを暴露することであった。そして、その手段が、空とぼけや皮肉（エイロネイア）であったのである。キェルケゴールは、このソクラテスの偽りの理解を明らかにした業績のために、彼を、第一級の倫理家と呼び、またアイロニーの大家と呼ぶのである。また、このような意味でのソクラテス的なものが、自分達の時代にも呼び起こされるべきであると、キェルケゴールは何度も主張するのである。

ソクラテス的なものによって矯正されるべきものは、誤った理解であった。そして、この矯正は、当然倫理的なものにかかわっている。理解ということそのものが、キェルケゴールにとっては、ただ単に知的な認識ということではなく、倫理と深い関係をもっているのである。では、先に挙げた、理解と理解の区別とは、いかなることなのか、本当の理解とは何なのか、誤った理解は何故

起こるのだろうか。

通常我々が使う意味での理解とは、自分自身の外部のものごとについての認識である。自分のことは明らかだと一般に思われているので、自分自身を理解するということは、殆ど問題にならない。例えば、数学や物理の証明を理解するとう場合、理解される証明は、理解する人にとって、全く外部のものである。理解する人と理解されるものごとの間に直接の関係はない。ところが、外的であってはならない理解がある。例えば、「私はこれこれの人間である」「私は、このように生きるべきである」「人間はなにをすべきである」などということがらを理解することである。このようなことからは、既に、理解する「私」「人間」が含まれている。つまり、理解されるものごと、すなわち客体と、理解する主体の間に、密接な関係があるのである。言い換えれば、このような理解は、本来内面的なものなのである。このようなことからは理解する為には、先のような、外面的な理解、つまり、単なる知的な認識だけでなく、そのほかに、理解している自分自身についての理解が必要なのである。理解したことを自分は実践しているか、自分の現在の姿と理解したことは一致しているのか、一体、自分はどんな状態なのか、ということについての理解、つまり自己反省が必要なのだ。

しかしまた、ソクラテスによれば、すべての知識は自分自身についての正しい知識なしには、意味のないものではなかっただろうか。どのような知識も、それを用いる人によっては、より有害なものになり得るといふ有名な命題や、自分はデュボンよりも複雑怪奇で更に傲慢凶暴な獣なのかもしれないという告白は(パイドロス230a)、どのような知識よりもまず自分自身についての知識が必要であるという主張だったのでないだろうか。

ソクラテスにまつわる有名な命題「汝自身を知れ」は、このような自己反省についての要求だった。先に挙げた理解と理解の区別とは、単なる直接的外面的な理解と、自己反省を含む二重の理解との区別だったのである。

一一

正しい理解とは、必ず自己反省を含む。正しいことを理解したと断言しながらも、不正なことをする人間は、矛盾のうちにある。この矛盾は、その人が、正しく理解していなかったから発生したのである。これがキェルケゴールの言うソクラテスの立場であった。「いかに生きるべきか」ということ、つまり、倫理的なものについての理解は、ただの知識であってはならない。それは即座に実行されねばならないのである。倫理的なことがらには、知識そのみは成

り立たないのである。

ソクラテスは、それゆえ無知の立場にとどまった。彼は正しいこととは何かと問いはしても、正しいことを理解したなどは、言わなかった。彼は、自分は無知であると告白する。しかし、この無知は、倫理的な意味では、全く違った意味を帯びるのである。自分が無知であるという反省は、一つの、倫理的な理解であった。そして、この無知の知こそが、ソクラテスの目指すものだったのである。

したがってソクラテスは、二つの功績によって第一級の倫理家として称えられる。一つには、理解と理解の区別を明らかにし、自分は知者であると詐称する彼の同時代人の仮面を剥いだこと、もう一つは、自身は知者を装わず、逆に、あくまで無知の者として留まり続け、それを常に貫き通した事である。

このソクラテスの立場は、いつの時代にも説得力をもっている。しかし、いたい誰が、自分は全く無知であるという立場に留まり続けていられるであろうか。我々は日常的に様々なことをなして行かねばならないのではないか。自分がこれからどう生きて行くかという問題に長く立ち止まっている訳にはいかないではないか。日常においては常に行動が求められているからである。ソクラテスは確かに超一流の産婆ではあったが、彼自身も言っているように、「産むことを禁じられた(テアイテトス159c)」身でもあったではないか。人はいつまでも自分がソクラテスの立場に留まれるものではないように感じられるということも、無視できることではないのである。キェルケゴール自身も「いかに数多くの人々が、ソクラテス的な無知を越えて更に先へ進もうという欲求を感じた事であろう。(S.87)」という。このような意味で確かに、ソクラテス的なものは、いつの時代にも、最も忘れられやすいものの一つなのである。

しかしそれでもキェルケゴールは、このソクラテス的な立場への立ち帰りを、彼の同時代人に要求する。ソクラテス的なものを顧みないことは、いかなる理由によっても正当とはされない。ただしキェルケゴールは、ソクラテス的なものへ立ち帰れ、だが、この立ち返るべきソクラテス的なものは結論ではないと言っているのである。結論ではなく、とはどういうことか。我々は理解にも二種類あるというソクラテス的なことをただ「理解」することだけでは十分ではないということにほかならない。このことを正しく理解、つまり自己反省を行うつつ理解しなければならぬのだ。ソクラテス的なものを結論とすることは、自己反省を放棄することになってしまう。

ソクラテス的なものとは、我々の外にあるものではなく、我々の日常生活において、常に自己自身を反省せよという内にある「倫理観」でなければならぬのである。我々は日常において常に自己反省を行い、自己の姿が自分の理解

したことを反映しているかを確かめなければならない。この反映が行われていなかったとしたら、実は理解していなかったのだというところへ戻らなければならぬ。このような、日常における倫理観として、ソクラテスのものは結論ではなく、我々自身の内にあり、我々の日常生活を推し進めるうえで、自分の思想が健康なものなのか不健康なものなのかを吟味し、生まれるべきなのか流産するべきなのかを判定する産婆(テアイテトス150b)とならなければならないのである。

このようなキェルケゴールのソクラテスの評価から、キェルケゴールの倫理観についての手掛かりをつかむことができる。一つは、倫理的であるためには、自己反省が必要であること、更には、その自己反省によって、人間は常にその理解とその生き方が一致しているかどうかを確かめていなければならないということである。

一一一

第一級の倫理家ソクラテスによって、自己自身を吟味するということ、すなわち自己反省の重要性が唱えられた。自己反省によって、我々は、自分自身についての意識、つまり自己意識をもつことになる。

しかし、キェルケゴールの思想における自己意識の意義は、実に様々であり、また、「意識、すなわち自己意識は、自己に関して決定的なものである。(S. 25)」と言われるように、キェルケゴールの自己論において、重要な役割を果たしているということが忘れられてはならない。そこで、『死に至る病』での絶望という心理現象の論述において自己意識と自己の関係について考察し、それらとキェルケゴールの倫理思想がいかに結び付いているのかを明らかにしたい。キェルケゴールは既に『死に至る病』冒頭で、その独特の自己論を展開している。

「人間とは精神である。しかし、精神とは何であるか。精神とは自己である。しかし、自己とは何であるか。自己とは、一つの関係、その関係それ自身に關係する関係である。あるいは、その関係において、その関係がそれ自身に關係するということ、そのことである。自己とは関係そのものではなくして、関係がそれ自身に關係するということなのである。人間は無限性と有限性との、時間的なものと永遠なものとの、自由と必然との総合、要するに一つの総合である。総合というのは、二つのものの間の関係である。このように考えたのでは、人間はまだ自己ではない。」

二つのもの間の関係にあつては、その関係自身は消極的統一としての第三

Synthese

Verzweiflung

者である。そしてそれら二つのものは、その関係に関係するのであり、その関係においてその関係に関係するのである。このようにして、精神活動という規定のもとでは、心と肉体の間の関係は、一つの単なる関係でしかない。これに反して、その関係がそれ自身に関係する場合には、この関係は積極的な第三者出会って、これが自己なのである。(S. 81ff)]

今しばらくこのキェルケゴールの人間理解を検討して見よう。

キェルケゴールにとって自己とは、「自己は無論自己自身であるが、しかし又、自己自身となるべきものである。(S. 82)」と言われるように、常に自己自身でありつつも、同時に未来の自己へと生成して行くという二重性をもったものである。別の箇所で、「精神生活においては静止状態というものは存在しない。そもそも状態というものすらなく、一切が活動なのである。(S. 93)」とも言われているように、キェルケゴールは、自己は自己自身に関係することによって、自己へと生成する活動性であり、そこに人間の本質があると考えているのである。

この人間の二重性から、キェルケゴールは自己を「総合」として捉える。人間は時とともに年をとり経験を積みかさね、忘却し、身体的にも変化して行く等、常に時間のうちで変化するもの、つまり自己自身へと成り行くものであるということが、キェルケゴールのいう時間的なものと考えることができ。しかし、それにもかかわらず、いかに変化しようとも自己は常に自己であるということとは、自己が時間を越えていると表現することもできるであろう。何故ならば、自己が変化して行くうちでも同一の自己でないとすれば、自己が変化するということさえ言えない筈であるから。

更に、「自己である」ものとしての自己は、有限なものであり、この自己以外にあり得ないという意味で、必然的ということもできる。けれども、「自己になる」ものとしての自己は、何等等限定をもたない自己を、想像によって自己のうちに映しだす。「想像は無限化する反省である。(S. 27)」とも言われる。この自己は自己の可能性である。人間は、想像によって自己を無限化し、さらにその未だ抽象的な自己を実現することによって、再び有限な自己となる。したがって、「現にある」自己と、「成り行く」自己との二重性を形作るものが、反省、つまり自己意識なのである。このことから、「自己とは反省である(S. 27)」とも言われるのである。この現にある自己から、将来の自己への移行において必然性と、自由とが現れるのである。

このように、キェルケゴールの考える自己、あるいは精神とは、無限性と有限性、可能性と必然性、時間的なものと永遠なものといった互いに矛盾する諸契機の総合であるのである。

Verhältnis
sich verhalten

人間とは確かに矛盾の総合である。しかし、キェルケゴールが言うように、人間とは単なる関係ではない。互いに矛盾する諸契機は、それだけでは単なる関係に過ぎない。総合をなすものもやはり自己であって、自己は、自己を形作る諸契機を意識的に総合すると考えられねばならない。この意味で、自己とは、関係そのものではなく、自己自身に關係する關係であると言われるのである。しかし、「關係する」とは、具体的には何か。「意識が増せばそれだけ自己が増し、意識が増せばそれだけ自己が増す。意識が増せばそれだけ自己が増す。意識を少しもたないような人間は、自己ではない。しかし、人間は、意識をもつことが多ければ多いほど、それだけまた多くの自己意識をもつのである。(S. 25)」と言われるように、「關係する」とは、自己を知る、つまり自己認識と、どのような自己になろうと欲するか意志の二面をもつことになるのである。さて、この關係は、自分自身で措定した關係ではない。自己は、自分自身に關係する關係であるが、その關係全体は、他者によって措定されたと考えねばならない。ここから、自己は、自己自身に關係しながら、更にその關係を措定した他者、すなわち神と關係する關係であるとキェルケゴールは考える。自己のうちにある矛盾の総合とは、いかにして可能なであろうか。自己が、本来の自己であるとは、矛盾の総合としての本来の自己とは、いかなるものなのだろうか。このことは、自己の非本来的な状態である絶望を考察することによって、消極的に明らかにされる。

四

自己とは、先に見たように、互いに矛盾する諸要素の総合である。「絶望は、それ自身に關係する総合の關係における不均衡 (Mißverhältniss) である。(S. 19)」と言われる。絶望の本質をキェルケゴールは、自己が矛盾の総合としての自己を実現していない状態としてとらえる。しかし、『死に至る病』における絶望の記述は、論理的に導き出されるものではなく、「心理学者(S. 19)」としてのキェルケゴールの人間心理の分析によって明らかになるものである。「人間を本当に知っている人なら、少しも絶望していないという人間など、その内心に動揺、軋轢、不調和、不安と言ったものを宿していない人間など、一人もいないと言うに違いない。(S. 18)」とキェルケゴールは、言う。この絶望の叙述を簡単に見てみよう。

まず最初に現れるのが、地上的なものに対する絶望である。もし我々が自己についての反省を含まない状態、つまり直接的であったとしたら、その我々は、自己自己について明瞭な意識をもっていないために、自己である、ということ

Willekin

については何の意識ももたないだろう。快、不快という感性的なものにしたがって生きているだけであり、漠然と環境やその影響を反映するだけである。しかし、何らかの地上的な困難がこの我々に降り懸かって来たときには、そのような困難が降り懸かってしまった自己から逃れようとする。何故ならばこのような人間は未だ、自己が、外面的なものとは全く違ったものであるということ意識せずにいるからである。ただ自己がこの困難の降り懸かった自己でない、他の人間に成れたら、と願望するだけである。これが我々が通常使う意味での「絶望する」ということであろう。

Abrahamson

ここで更に反省を推し進めたとしたら、この人間は、他の人間になる事を願望するということが、滑稽な事であることを理解するにちがいない。何故なら自己とは、直接的なものとは全く異なったものなのであって、地上的なものを失ったからといって、自己が失われるものではない。地上的な困難を乗り切るために必要なのは、「一切の外的なものからの無限の抽象によって獲得される自己(S.54)」なのである。この抽象的な自己が、現実的な自己を様々な難点や長所もろともに引き受ける推進力になるのである。

しかし、この抽象的な自己を獲得し、それを実現することは、常に苦痛を伴う。何故ならば、この抽象的な自己を獲得するためには直接的なもの、すなわち外界や環境からの影響や、自分の感性的な傾向性からの断絶を行わねばならないからである。

そこで、自己の弱さについて絶望するという形態の絶望が現れる。つまり、自己自身について絶望するのである。「絶望者は、自分が地上的なものにそれほど思い煩うのが弱さであり、絶望することが弱さであることを、みずから理解している。(S.61)」この段階の絶望に陥っている自己は、自己以外のものとの関係を断つという表現をもつことになる。地上的なものを軽蔑するあまり、地上的なものとの関係を断ち、自己自身のみをみつめるようになるのである。

しかし、自己であろうと欲しない自己が、何故自分が自己であろうと欲しないのかという理由を意識するならば、実はそれは、自己であろうと欲しているからであるということが明らかになる。この自己は、他者によって措定された本来の自己であろうとはしないが、自分で発見した、恣意的な自己であろうとするのである。この形態の自己は、自分を支配する力の存在することを認めない。しかし結局のところ、この自己には、真剣さが欠けるのである。何故ならば、自己の基礎とするものが、ただ自己自身だけであるならば、自己は、すべて自己の恣意にかかることになり、いつでも自己全体を無に解消することができるのであり、自己に、絶対的なものは存在しないことになってしまふからである。いつでも恣意的にやり直せるようなものに、どうして真剣さがあり得るだ

Ernst

ろうか。キェルケゴールはうまい譬えを使っている。「この絶対的な支配者は、国土をもたぬ国王であることがすぐに分かる。彼は実は何ひとつ統治してはいないのである。彼の地位、彼の支配は、いかなる瞬間にも、反乱が合法的であるという弁証法に支配されて居る。つまり、それは、結局自己自身の恣意にかかっているからである。(S. 69)」

結局このような絶望も、自己であろうと欲しながら、本来の自己であろうとは、欲していないことになる。自己が、具体的に必然性と限界をもった特定の自己であるということ認めないということは、欺瞞であり、本来の自己自身であるとは言えない。ところが、自己が特定のものであるということ認めることは、そのような特定の自己を措定し、苦悩を与えた力、すなわち神を意識させることになる。そこで自己意識が最高度に達した絶望は、神に対する反抗という形を取るのである。すなわち、悪魔的なものとキェルケゴールが呼ぶ形態である。このように絶望は、最終的には、悪魔的なものへと行き着く。地上的なものを失った苦しみは、そのような自己を措定した力への憎しみとなるのである。

今まで見て来た多様な絶望の形態が、それぞれ現実の人間として存在するのだろうか。そのように考えるならば、我々は誤りを犯すことになるであろう。今まで見て来た様々な絶望は、「自己意識の規定のもとに」考察されたものであったが、これは、一人の人間が、最初は何らかの地上的な困難に出会い、自己反省を深めるにつれて次第に現れて来るような様々な様相であると考えるべきである。何故ならば、自己意識というものが、人それぞれによって、比べられるはずがないではないか。絶望とは、明瞭な自己意識をもつことによって、それぞれの人間に次第に明らかになるものなのである。

1 今まで見て来たように、本来の自己ではない自己、つまり絶望している自己には、大きく分けて二つの形態がある。一つは、本来の自己から逃げ出そうとする絶望、もう一つは、非本来的な自己であろうとする自己である。キェルケゴールは前者を弱さの絶望、後者を反抗の絶望と名付けてはいるが、勿論このことは、実は、基本的には同じことの異なった表現であるに過ぎない。「自己について絶望すること、絶望して自己自身から向け出そうと欲すること、これがあらゆる絶望の公式である。したがって、絶望して自己自身であろうと欲するという、絶望の第二の形態は、絶望して自己自身であろうと欲しない第一の形態に還元されることができる。(S. 16)」絶望とは、端的には、本来の自己自身であることを拒絶することである。つまり、自己反省によって獲得される、自己についての明瞭な意識をもたないこと、あるいは、自己を引き受けないということが、絶望なのである。

今まで述べて来たキェルケゴールの自己と絶望の概念は、明瞭な自己意識をもって初めて明らかになるものである。自己が自己自身でありながらも自己へ生成するものであるということは、何ら自己意識をもっていない自己には気付きようがない。しかし、自己意識をもたねばならないとする立場からは、このように自己意識をもっていないことは、勿論正しい在り方とは認められない。キェルケゴールの立場からすれば、自己意識をもたないあり方もやはり、自己であろうと欲していないということになる。このことから、「自分が絶望していることを意識しない非本来的な絶望もありえる。」という逆説的な表現も正当化される。

自己意識をもつということは、このようにして、自己を「精神」として意識すると言い換えられることになる。そして自己を精神として意識していない立場は、無精神性であると言われる。前で見たとような、口先だけの滑稽な人間は、非本来的なものではあるが、絶望の状態にあると捉えなおされなければならぬ。

自己について明瞭な意識をもつべきであるという倫理的な課題は、人間は自分が絶望しているかどうかということについての明瞭な意識をもたねばならぬという課題をも含むことになる。そして絶望から解放されることは、自己を措定した他者すなわち神の存在を認め、神に服従するという事では解決されない。また、自己であろうと欲しないということがあってはならないということも明らかである。そこでキェルケゴールは、絶望から解放された状態を、「自己自身に関係し、自己自身であろうと欲することにおいて、自己は、自己を措定した力(神)のうちに、透明に、根拠をおく。(S.10)」と表現することになるのである。したがって、倫理的な課題を実現しようとする者は、絶望という現象を通して、信仰という問題と対面することになるのである。

五

今まで見て来た様々な絶望は、絶望者の主観には、苦悩であり、本来的な自己であることを人間の課題であるとする立場から見れば、その課題を達成していないということであらわすものであったが、『死に至る病』第二編では、この絶望が実は、罪と呼ばれるべきものであることをキェルケゴールは明らかにする。「罪とは、神の前で、あるいは神の観念を抱きながら、絶望して自己自身であろうと欲しないこと、もしくは、絶望して自己自身であろうと欲することである。」

しかし本来の自己ではない苦悩である絶望が、なぜ罪とされねばならぬの

だろうか。

キエルケゴールは、上で見たような罪の定義、すなわち、罪とは神の前で絶望して自己自身であろうと欲しない、もしくは絶望して自己自身であろうと欲すること、という罪の定義から、罪の対立物は信仰であり、異教徒が考えていたような徳ではないと主張する。古代ギリシヤ人にとっては、罪は錯誤であった。それに対立するものが徳だった訳であるが、それはキエルケゴールによれば、人間に対する要求が人間的なものであったということを示すのであった。キリスト教的には、人間に要求されているのは、まず神に対する従順であり、この観点からすれば、人間の犯す個々の不正な行為は、神に対する反抗という更に深く大きな罪の現れでしかない。したがって、罪の対立物は、徳ではなく、信仰であるという。

このキリスト教的な罪の定義を鮮明にするために、キエルケゴールは、異教的な知恵の最上のものとしてソクラテスのなものを取り上げ、それをキリスト教的なものと比較する。

ここで取り挙げられるソクラテスのなものは、罪は無知であるという命題である。本論の最初に見たように、ソクラテスの立場は、真に理解することと、誤って理解することとの区別を明らかにする立場であった。あるひとが不正なことをしてしまった場合は、それは、実は無知だからである。彼は、自己反省を怠っていたのであった。

何故なら、ソクラテスの立場では、人が何かをするときは、それには必ず目的があり、それは自分にとって善いと思えることである。不正なことをする人も、実はそれが自分にとって善いことだと思っただけなのである。したがって、誰も積極的に不正なことをすることを望む人はいないのであって、不正なことをする人は、不正なことを正しいことだと思っただけなのである。不正を犯す人は本意ながらするのである。したがって不正を犯すのは正しい知識をもっていなかったから、すなわち罪は無知である。

このソクラテスの見解の意義は重大であった。しかし、キエルケゴールは、ここに一つの疑問を投げかける。罪が無知だとしたら、一体その無知は、いつ発生したのか。人間がもともと無知であり真理について何も知らなかったとしたら、何故人間は真理を求めなのか、という問題は、プラトンの想起説にまつわる難問であった。しかし人間が後から無知になったのだとすれば、何故無知になったのか。人間が無知になるその瞬間にそのことを意識していなかったとすれば、その人間はその前に既に無知だったことになる。このようなことは、矛盾である。そこで罪は無知とは違ったものではなく、ソクラテスの見解は十分ではないとキエルケゴールは指摘するのである。

Kenntnis Socrates Tugend Glaube

確かに罪が無知であることになれば、罪というものは存在しないことになる。
罪は単なる過失に過ぎない。

それでは、キエルケゴールによれば、罪はどこにあるのか。罪は、認識のうちにあるのではなく、認識が曇って行くのを認める働き、つまり意志のうちにあるのである。

現実の人間において、あることを理解することから、そのことを実行することまでには、ある弁証法的な移行がある。理解することは認識の働きであるが、実行することには、意志の働きもまた必要である。ところが、意志は人間の低級な性質を含んでいるのであって、正しいことを即座に実行するのを妨げるのである。そうしているうちに、認識は曇ってしまい、意志もそれを是認する。結局曇ってしまった認識は、正しいことと不正なことの区別を忘れてしまうのであるとキエルケゴールは言う。

これがキエルケゴールの説明である。しかし、このような説明では、キエルケゴール自身も認めているようにソクラテスのものより、先に進んでいる訳ではないのである。このような説明には、更に、何故意志が人間のていきゅうなものを含んでいるのか、何故人間は、正しいことを欲しないのかということが問われなければならないであろう。それに答えることができないければ、ソクラテスからすれば、そのようなことは人間が無知だから起こるのであるということを経明することに外ならないことになってしまう。つまりこのような説明は、罪が何故発生するのかという問題に、人間は答えることができないということを経明することではしかないのである。

そこでキエルケゴールは、人間はとって罪とは、神から啓示によって示されているものであり、人間が理解するべきものではないのだという。そして啓示によって、人間は元々罪の内にいることが宣告されているのであると言う。ここで、キエルケゴールとソクラテスの考え方の違いが明らかにになる。ソクラテスには、人が、正しいことを理解していながら不正なことを行うということとは、考えられなかった。それに反してキエルケゴールは、人間は正しいことについての知識をもちながらも不正なことをするのだと宣告するのである。

これがキリスト教的な意味での罪である。罪はソクラテスが考えたような無知のうちではなくではなく、意志のうちにある。一つの不正なことを行うことは、それを行う人が、罪のうちにあるということを経明らかにするものなのである。

だが、キェルケゴールの、キリスト教的な罪の概念について考察する前に、もう一度異教徒の立場から悪という問題を考えて見よう。

ある人が正しくないことをしてしまう。そのときに、その人が自分が不正なことをしていることを知らないのだとしたら、どの人は正しいことを全く知らないでいるのか、又は、正しいことは理解しているのだが、自分が何をしているのかを理解していないかどちらかであろう。自分が何をしているのかを理解していないということは、ソクラテスによれば、実は理解していないということであった。正しいことと不正なことの区別を全く知らなかったのだとしたら、不正なことをしてしまった人もべつだん不正であるとは言えないであろう。しかし、正しいことが何であり、不正なことが何であるかを理解しつつも、不正なことをなす人間は、まさしく不正である。

しかし、我々はまた違った立場で考えるのではないだろうか。自分が不正なことをしていることを理解していると考える立場である。例えば、「自分は正しいことは何であるかを知っている。少なくとも、正しいことを理解したいと思っている。不正をなしてしまうこともあるが、それは、私が不完全な人間であるからである。感性や欲望に負けてしまったり、判断を誤ったりしてしまうのはそのためである。だから私は常に努力しているのである。努力を続けていれば将来十分に強くなれて、悪への誘惑にも勝てるようになるであろう。少なくとも、このように努力していることは正しいことのはずだ。」という立場である。

このような立場は、確かに、我々にも理解し易いように思え、正しい立場のように見えるのではないだろうか。恐らく、自己反省を徹底的に行えば、この立場に行き着くことであろう。これが、異教徒の立場でもある。

しかし、キリスト教の立場は、全く違う。キリスト教の立場では、人間は罪のうちにいるのであるから、悪が何であるかということは人間の立場からは分からないのだというのである。

上のような、悪を自分の弱さや感性や過ちに還元してしまうことは、キリスト教から見れば、単なる弁解や、言い繕いでしかない。そのような弁解をすることそれ自身が既に悪、つまり罪なのである。

勿論、このような観念は、人間が考えつくものではないのであり、このことを明らかにするには、人間以上のものからの説明、神の啓示がなければならぬのである。したがって、キリスト教によって罪の告知が行われる以前の異教徒にとっては、厳密な意味での罪は存在しなかったのである。

人間が本来悪であり、正しいことを理解していたとしても不正なことを行うものであり、人間は誰しも罪人なのだということは、既にキリスト教によって

告知されている。しかし、人間にはこの告知の内容を、概念把握することはできないのである。何故ならば、それは人間の悟性を越えているからである。

したがって、人間が実際に悪を行うということ、そして、この罪は、人間の立場からは理解されず、罪が何であるかということ、それを明らかにすることからして既に神の啓示がなくてはならないということは、人間にとって理解され得ないこと、すなわち躓きとなるのである。

キェルケゴールによるキリスト教は、このここから始まる。人間の立場（特にその第一人者としてのソクラテスの立場でさえも）では、理解と理解の区別という地点にまでしか到達できなかった。そして、このような立場さえも、キリスト教からすれば、罪なのである。

七

キリスト教においては、罪の問題さえも、信仰に委ねられ、概念的に理解されるべきものではない。このことを明らかにするために、キェルケゴールは多くの言葉を費やしている。罪は、認識の欠如や、誤謬ではないのである。

罪が何であるかを説き明かすためには、神の啓示がなくてはならないということ、そしてその啓示は既にイエスによって語り伝えられており、罪が何であるかということは、理解ではなく、信仰に委ねられるということが、自然のままにいる人間、すなわち異教徒とキリスト教の最も鮮明な違いである。そしてキリスト者たるキェルケゴールは、この罪の問題が、キリスト教の核心であり、キリスト教を守るために他のすべての異教的なものから守られねばならないものなのだと言う。

では、デンマークというキリスト教国において、キェルケゴールにとって、キリスト教を守るために、異教的なものとして排撃されなければならないのは、何だったのだろうか。それはヘーゲルに影響を受けた思弁教義学であり、さらにデカルト以来の近世哲学全体だったのである。

思弁教義学の立場は、人間の悟性によって、キリスト教的なものを合理的に理解しようと企てていた。しかし、キリスト教的なものが、概念的に把握されるのであれば、キリスト教的なものは、その積極性を失うことになる。何故ならば、概念的に把握することそのもののほうが、概念的に把握されるものよりも高い立場にいるようになってしまふからである。キリスト教が概念把握されるのであれば、キリスト教よりも、それを概念把握する人間の方が高い立場にあることになってしまう。

そこでキェルケゴールは思弁の立場を排撃するために、ある戦術を採る。つ

begreifen

spekulative
Dogmatik

まり、概念的に把握しようとするあらゆる試みが、自己矛盾であることを明らかにすることができれば、問題はふさわしい方向を採り、キリスト教的なものは信仰に、人が信じようと欲するかしないかに、委ねられねばならないことが明らかになる、ということである。

ここでケルケゴールは面白い譬話をしている。ある国王がただの人間のように取りあつかってもらいたいと思いついたとしたら、臣下はどのように対処するべきであろうか。国王の命令に従って国王をただの人間のように扱ったら良いのだろうか。しかしそれは国王の命令に従うということであって、ただの人間として扱っている訳ではない。それでは国王の命令に従わずに、国王を国王として敬えば良いのではないだろうか。しかしそれは逆に国王の命令に背くことになるのではないだろうか、と言うのである。

罪を概念的に理解しようとすることは、キリスト教にとっては、何ら功績になることではなく、逆に、キリスト教を弁護するためにと称して、罪を合理的に解釈できるようにしようとすることは、キリスト教の名をかたりながら、キリスト教を人間的なものへおとしめることになる。

罪の問題が躓きとしてあるべきであって、概念的に理解されるべきではないということ、キリスト教にとって絶対を守られなければならない核心なのである。では何故思弁は罪を概念的に把握できると思いついたのだろうか。思弁の誤りの核心はどこにあるのだろうか。

また思弁的な思考を行う者は、人間を抽象的にとらえるだけで、自分自身が単独の人間であり、自分自身に責任があるということ忘却してしまっている。人間が罪人であるということ、三角形の角の和が二直角であるのと同じように外面的に理解されるのであれば、その理解には何の意義もないのである。人間が罪のうちにあることを理解する為には、我々は、抽象的な「人間」ではなく、具体的な「私」が罪人であるということを見詰めなければならぬのである。個々で現れるのが、個々の「私」、つまり思弁が扱う普遍的なものに對立する、単独性という範疇である。

思弁の錯誤は、思弁が、抽象的な思惟に陥り、現実の人間を見失ってしまつたことよって引き起こされた。人間が思惟できるものは、人間という概念だけであって、各の単独の人間を思惟することはできない。そして、罪は、絶望するものが個々の人間であるように、単独の人間が犯すものであって、抽象的に考察された人間や、集団としての人間が犯すものではないのである。したがって、抽象的な罪の概念は思考の対象にすることも不可能ではないが、具体的な個々の人間が犯す罪は思考の対象には決してならない。

したがって、ソクラテス的なものは、このキリスト教的なものの領域の内で

der Einzelne

Ausstopf

Ethiken

も大きな役割を果し得る。ソクラテス的なものは、思弁的な哲学全盛の時代にあっては、見せかけの「知者」の仮面をはぐことができるに違いない。キェルケゴールにとって、ソクラテスは、ほかならぬ神に対する畏敬の念から無知であつたのであり、神と人間との境界線に立って、審判者として、神と人間との間の質の差という深淵がどこまでも存続するように見張っていたのである。そして、これがキェルケゴールの認める第一級の倫理家の姿なのである。

この地点で、我々が追究して来た倫理的なものは、思弁と真っ向から対立するものとなるのである。「罪にあつては、倫理的なものがあづかっていることに、思弁は注意を払わない。倫理的なものは、いつでも思弁とは逆のものを強調し、思弁とは正反対の方向に歩むのである。というのは、倫理的なものは現実を抽象するのではなく、かえって現実の中へ深くは入り込み、本質上、思弁によって見過ごされ軽蔑されている単独性という範疇の助けを借りて操作するものだからである。(S. 121)」

罪は、理解されるべきものではなく、信仰によって個人がそれをうけとめなければならぬものである。そして人間をこのことに気付けさせるものが、現実の具体的な自己についての意識、つまり自己意識であり、倫理的なものなのである。

結び

これまで見て来たように、キェルケゴールの思想において倫理的なものとは、ソクラテス的なものをキリスト教に導入し、人間各人に自覚を促し、再び「魂の気遣い」を思い起こさせるものであつたと言える。キェルケゴールにとって、倫理的なものとは、まず明瞭な自己意識を要求するものであつた。明瞭な自己意識は、自分が未だ不完全なものであることを意識させるものであり、絶望していることを明瞭に意識することでもあつた。つまり、倫理的なものは、自己の罪を暴くことによつて、自己を絶望に導くものでもあつたのである。

しかしながら、自己が絶望していることを意識することは、それを突き詰めれば、自己が他者、すなわち神によつて措定されていることを思い起こさせることでもあつた。「絶望を通してのみ、人間は信仰へと至る」といわれるように、信仰に至るためには人間はまず絶望しなければならぬのである。

また、倫理的なものは、罪を抽象的に思考しようとする思弁に拮抗する。思弁が抽象的なものを扱うのに対して、倫理は、単独の人間にのみかかわるものなのであり、単なる思惟の対象とはならない。倫理は、現実の人間生活において、常に重んじられるべきものであるが、しかし、それ自身では存立せず、

常にキリスト教的なものによって裏付けされていなければならない。しかももし倫理的なものが、キリスト教的なものによって裏付けされていなければ、逆に、キリスト教的な立場から、何の根拠ももたず、真剣さに欠ける、一種の絶望として排撃されねばならないものになってしまうのである。

したがってキェルケゴールの思想における倫理的なものとは、神から人間に要求されるものであり、あくまでキリスト教を守るものなのである。

しかし、我々が、このことをただ単に理解するだけであれば、それは本来の理解ではないということも忘れられてはならない。そうであれば、我々はまず、ソクラテスを思い起こすことから始めなければならないのである。